

春 —第1楽章— (「和声と創意の試み」第1集「四季」から)

ヴィヴァルディ*作曲

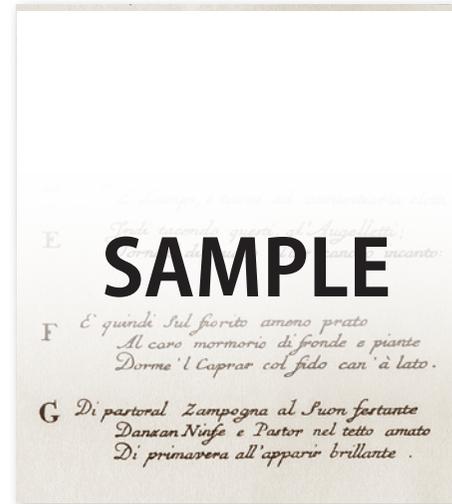
森 立子

ヴィヴァルディ(1678~1741)は、その生涯を通じて、膨大な数の作品を書き上げました。その中で、今日最もよく知られているのが、「四季」と名付けられた協奏曲でしょう。

独奏ヴァイオリン、弦楽合奏、通奏低音のための協奏曲「四季」は、春・夏・秋・冬の4曲からなっています。それぞれの曲には、季節のありさまを描写する詩(ソネット)が添えられています。

この「春」の第1楽章では、明るく輝かしい春の様子が、音楽によって巧みに描写されています。あちらこちらから聞こえてくる小鳥のさえずり、そよ風に誘われて流れていく泉の水、稲妻と雷鳴などが、技巧的な独奏ヴァイオリンと合奏によって、どのように表現されているのかに注目しながら聴いてみましょう。

*A.Vivaldi: アントニオ ヴィヴァルディ



出版された楽譜に掲載されている「春」の部分のソネット。全部で14行からなっている。A~Eが第1楽章、Fが第2楽章、Gが第3楽章のもの。



15世紀に活躍した画家ボッティチェリの「春」。ローマ神話に登場する神々が描かれている。花柄の衣装をまとっているのが春の女神プリマヴェーラ(花の女神フローラともいわれる)。

春 —第1楽章—

春の訪れを示す合奏部分



「春がやって来た。小鳥は楽しい歌で、春を歓迎する。泉はそよ風に誘われ、ささやき流れていく。黒雲と稲妻が空を走り、雷鳴は春が来たことを告げる。風がやむと、小鳥はまた歌い始める。」

小鳥の楽しげなさえずりを軽やかに奏する独奏ヴァイオリン



春が来たことを示す合奏の旋律が随所に現れ、曲全体を統一しています。その間に、小鳥やそよ風、雷鳴などの春の情景が織り交ぜられていきます。

夏 —第3楽章—

激しい嵐を表現している合奏部分



「恐るべき雷鳴と稲妻、麦の穂を折り、穀物を打ち倒す。」

技巧を凝らした独奏ヴァイオリン



「夏」では、人間に害を与える自然がテーマとなっています。第3楽章では、イタリアの地を襲う激しい嵐が、16分音符の連続によって表現されています。

秋 —第3楽章—

狩人たちの期待を感じさせる合奏部分



「夜明けには狩人たちが手に銃と角笛を持ち、犬を連れて狩りに出かける。逃げる獣、追う狩人。恐ろしさに疲れ果てた獣は、それでも危険を避けて逃げまどう。追いつめられた獣たちは、逃げる力も尽き果てて、ついに倒れる。」

力尽きた獲物たちの様子を表現している独奏ヴァイオリン



「秋」の第3楽章では、狩りの場面が、はずむような音楽によって描かれています。独奏ヴァイオリンは、逃げまどい、やがて力尽きて倒れる獲物たちの様子を表しています。

冬 —第2楽章—

雨だれを表現している第1、第2ヴァイオリンとぬくもりに満ちた旋律を奏する独奏ヴァイオリン



「暖かい暖炉で人々が安らかに過ごす間に、万物は恵みの雨で潤う。」

厳しい冬の季節であっても、暖炉の前で心静かに暮らし続ける人々。この第2楽章では、そうした人々の様子が、独奏ヴァイオリンの美しい旋律によって表現されています。ヴァイオリンのピッツィカートは、雨だれの音を模倣しています。

階名はこうしてできた!

～ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの誕生～

上野大輔

11世紀頃、イタリアの修道士グイード ダレツツォ(991頃～1033頃)は、旋律をすぐに覚えて歌えるようにするために、ド(ウット)・レ・ミ…で知られている階名唱を考案しました。

グイードは、賛歌「貴方の僕たちが」(右の譜例)の各節の開始音に付いている歌詞の音節から「ドレミ…」をつくりました。この賛歌は1200年前(日本の平安時代)頃からキリスト教の教会で歌われていたようです。

各節の開始音は順に高くなっていき、それらの音に付けられた歌詞を取り出して、「Ut Re Mi Fa Sol La」という階名がつけられました。当時まだ「Si」はありませんでした。6つの音の全音と半音との関係は次の図のようになっています。

当初は「ミ」と「ファ」の間だけが半音の関係を示す簡単なものでした。例えば、今日ならば「シ」「ド」(口音と八音)と歌うような半音のところも、「ミ」と「ファ」で読めるように読み替えて歌っていました。

バロック時代になると、長調と短調の調性が確立し、新たに「Si」がつけられ、「Ut」はより歌いやすい「Do」という読み方になりました。

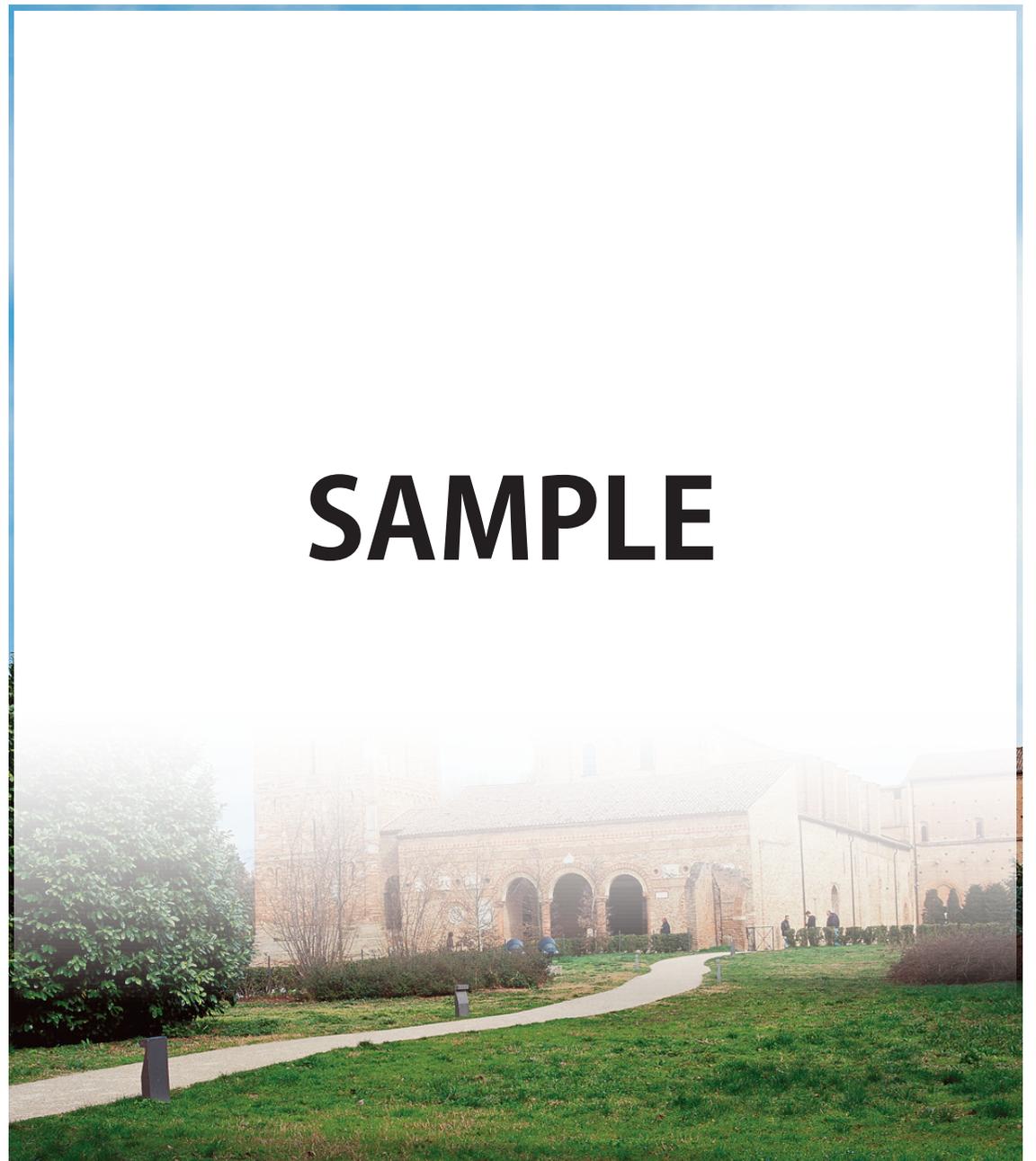
賛歌

この歌詞は、神に祈るために身を清めてもらいたいと願っている内容になっています。

「ドレミ…」にこんな歴史があったなんて知らなかった!



SAMPLE



イタリア北部の都市フェラーラにある、ボンポーザ修道院。ここでグイードは歌唱法の研究をしたと伝えられている。

TOPICS グイードの手

右の図は、音階の早見表のようなもので、「グイードの手」と呼ばれています。左手の指の各関節に音名を割り振り、音階と音名、階名の仕組みを図示しています。

SAMPLE



A 「全7編」です。インドの三大祭典の一つであるダシャーラーでは、9日間の断食の間に「ラーマーヤナ」がインド全土で語られます。

アメリカやイギリスの音名は「C・D・E・F・G・A・B」です。では、日本の音名は何でしょう?

赤とんぼ

み き る ふう や ま だ こ う さ く
三木露風 作詞 / 山田耕筰 作曲

日本語を大切にした作曲

山田耕筰(1886~1965)は、“あかとんぼ”の“あ”の音を高くしています。ここだけを取り出して朗読してみると、現代のイントネーションと違うように感じるかもしれませんが、これは作曲当時の日本語の抑揚を大切にした結果です。この「赤とんぼ」の他にも、「ペチカ」「待ちぼうけ」「この道」「からたちの花」「兎のダンス」「かやの木山の」「六騎」など、日本語の語感を大切にした歌曲や童謡、唱歌をたくさん発表しています。

ペチカ



この道



豆知識

大正時代の童謡

大正時代には、「赤い鳥」「金の船」をはじめとする童話や詩の雑誌が相次いで刊行され、そこに発表された詩に作曲家が競って曲を付けました。詩人では三木露風(1889~1964)の他に北原白秋、野口雨情、西條八十、竹久夢二らが、作曲家では山田耕筰の他に成田為三、中山晋平、本居長世らが積極的に作品を発表しました。



日本の愛唱歌のナンバーワン

愛唱歌のアンケートを行うと、決まって「ふるさと」と「赤とんぼ」がトップを競うといわれています。戦後のある時期に、人々が争いごとで対立していたとき、「赤とんぼ」がどこからともなく歌い出され、緊張した空気がしばし和んだというエピソードも伝えられています。考え方や年齢の違いを超えて、この歌は日本人の心に無条件に受け入れられているようです。

「桑の実」ってどんな形?

桑は数メートルの高さにまで成長する落葉樹です。その葉は主に養蚕のために栽培されていました。今では生糸産業の衰退により、桑畑も少なくなっています。

葉は桑茶になり、赤黒く熟した甘酸っぱい実は、ジャムや果実酒の原料になることも多いようです。

桑畑(左)と桑の実(右)

